

[論 文]

王 充 と 董 仲 舒

Wangchong and Dongzhongshu

鄧 紅

Deng Hong

一、問題の提起

董仲舒（紀元前200? - 前106?の間）は中国前漢時代の大儒者で、『春秋繁露』¹を著した。

王充（約27-97年）は後漢時代の大思想家で、『論衡』85篇（1篇遺失）を著した。²

約200年間離れて、あまり関係のない二人の中国古代思想家であるが、1950年代から1990年代までの中国の哲学思想史研究界では、対立の構図に立たされたのである。一見滑稽な話ではあるが、それを理解するために、中国哲学研究の歴史を遡らなければならない。

1990年までの中国人民共和国の中国哲学史研究は、概ね以下のようなスターリン主義哲学の教条に基づく。

本体論からみれば、数千年来の哲学史は、唯物主義と唯心主義との闘争の歴史であるという。唯心論はまた客観唯心論と主観唯心論に分けられる。

方法論からすればそれぞれの哲学思想は、必ず弁証法的なものとし形而上学的なものに分けられる。

階級闘争の立場からみれば、唯物主義および弁証法は被搾取階級の理論であるが故に進歩的であり、唯心主義および形而上学は搾取階級の理論であるが故に反動的であるという。唯心論の中では、主観唯心論が最も悪いという。

上記の二分式研究方法を使って、董仲舒と王充を判定すれば、次のようなことになる。

董仲舒の思想が天道陰陽五行説を中心に行っていることから、董仲舒の哲学を唯心主義的「神学目的論」と概括された。毛沢東はかつて董仲舒の語録「天不変、道亦不変」を「形

¹ 『春秋繁露』の文献問題について、中国では董仲舒のものとされているが、日本では様々な論争がある。この論争について、拙文「日本中国学界有関『春秋繁露』偽篇問題的論争」（国際学術誌『先秦兩漢学術』第二期、2004年）では詳しく論述した。小論は『春秋繁露』を董仲舒の著作とする。

² 『四庫全書提要』はなぜ『四庫全書』に『論衡』を収めたかについて、「然大抵訂偽詆俗、中理者多、亦殊有裨益於風教。…儒者頗病其蕪雜、然終不能廢也。」と述べたが、「雑家」類に入れたのである。

而上学的」哲学の典型として批判したこともあるから、董仲舒の思想は「形而上学的」なものだとされた。³特に、董仲舒が「天道」を講じ漢の武帝に「独尊儒術」を進言したので、董仲舒思想は「特に農民蜂起に立ち向かうものだ」と⁴批判されていた。要するに、階級闘争の立場から見れば、董仲舒は儒教を国教にした立役者で、高い地位にいたので、大地主の利益を代表するものだと判定されていた。さらに、哲学史は唯物主義と唯心主義との闘争の歴史だという観点から見れば、董仲舒は漢代において「唯心主義陣営の主将」とされた。

それでは、漢代の「唯物主義陣営の主将」、「弁証法的な哲学の代表」、言い換えれば、董仲舒の哲学体系の対立面は誰かといえ、漢代最大の唯物主義者である王充だ、といった具合である。

具体的に言えば、王充は「天人感応」の官製哲学を批判し、「天道自然」を主張するので、彼の本体論は唯物論だという。王充は「人死不為鬼」を主張しているので、彼は立派な無鬼神論者だという。彼の認識論は讖緯迷信を批判したので、唯物主義精神が溢れて、科学精神の代表者だという。階級闘争の立場から見れば、王充は「細族寒門」、「不当権派」つまり権力を握っていない地主階級の意識を反映するものであるという。

上記をまとめてみると、次のような表になる。

	総 評	認 識 論	鬼 神 論	所属階級
董仲舒	漢代唯心主義陣営の代表 天と陰陽五行を中心とした唯心主義哲学体系、目的論的な神学観	形而上学的哲学 「天不変、道亦不変」(対策)	「天」を中心とした封建神学体系を作った張本人。 讖緯迷信の基礎	大地主階級の代表 官方哲学
王 充	漢代唯物主義陣営の代表 元気を中心とする自然観 「天人感応」反対	唯物主義認識論 「考論実虚」(自紀篇)	無鬼神論、迷信反対 「天無聴視」、科学精神の代表	小地主階級の代表 (あるいは非当権の地主階級)

1990年以後中国では、上記の教条主義的な研究法が使わなくなったが、しかし、その方法の元で出された見方は、また存在していると見られる。⁵日本学界に今でも根強く残っている王充の思想は「合理主義だ」、あるいは「無鬼神論だ」、という見方がその延長線にあると見られる。

では、虚構の対立関係が崩れた今、王充と董仲舒とは、ほんとにどんな関連性があるのか？ 言い換えれば、約200年後の王充は、どのように董仲舒を見て論じているだろうか？

³ 毛沢東曰く、「在中国，則有所谓‘天不変，道亦不変’的形而上学思想，曾长期地为腐朽了的封建统治阶级所拥护。」(『矛盾論』)

⁴ 侯外廬氏著『中国思想通史』第二卷、人民出版社1957年版などに随所見られる。

⁵ 中国の高校入試において、歴史科目の「考試大綱」は、今でも王充を「无神论者、古代の唯物主义を護り、發展させた」としている。

王充と董仲舒両方を研究対象としてきた筆者はそれに究明したい。⁶

この問題について、いままでの先行研究におよそ以下のものがある。

- 1、林麗雪氏著『董仲舒』（東大図書公司1991年版）「第四章、王充对漢代諸子の批評」
「一、董仲舒」では、王充が「土龍致雨」を中心に董仲舒批判を展開したが、董仲舒の「類推法」を継承したとも述べた。
- 2、陳叔良氏著『王充思想体系』（台湾商務印書館1982年版）「第三章、王充思想的淵源」
「第二節、兩漢学人（劉安、董仲舒、班彪、桓譚）」では、王充思想のルーツを探り、王充思想に儒家思想があれば、それが董仲舒に近いと述べた。
- 3、周桂鈿氏著『虚実之弁』（人民出版社1994年版）「第十章、広評諸子」
「一、董仲舒」では、王充の董仲舒評価が非常に高く、深みがあると述べた。その前に、周氏は『董学探微』（北京師範大学出版社1989年版）「第十四章、総評」
「三、董学对東漢的影響」では、董仲舒と王充の関係を述べた。

以上の先行研究は、事実と違うと思われるものが見られ、林氏の「王充が『土龍致雨』を中心に董仲舒批判を展開した」というのがそれである。ほかの研究は、王充の董仲舒論をある程度把握したが、王充の董仲舒論の全体像が明らかに究明したと言いきくと思える。

それらの先行研究を踏まえて、小論では、まず、『論衡』にある董仲舒を言及した部分を全部探し出し、王充はいったいどのような董仲舒論を展開したか徹底的に調べる。第二節では、「雩祭」について詳細に考察する。最後に、王充の董仲舒評価をまとめる。それらの探求を通じて、王充の董仲舒論の全体像を描きたい。

二、『論衡』に董仲舒を言及する箇所

以下、『論衡』84篇の順に沿って、董仲舒を言及する箇所を全部取り上げて、簡単な解釈を施すことにする。

『論衡』第13「本性篇」に3箇所がある。

董仲舒覽孫、孟之書、作情性之説、曰：「天之大經、一陰一陽。人之大經、一情一性。性生於陽、情生於陰。陰氣鄙、陽氣仁。曰性善者、是見其陽也。謂惡者、是見其陰者也。」若仲舒之言、謂孟子見其陽、孫卿見其陰也。處二家各有見、可也。不處人情性、情性有善有惡、未也。夫人情性同生於陰陽、其生於陰陽、有渥有泊。玉生於石、有

⁶ 筆者の董仲舒研究には、著書『董仲舒思想の研究』（人と文化社1995年版）、『董仲舒的春秋公羊学』（中国工人出版社2001年版）および『董仲舒思想研究』（台湾文津出版社2008年版）があり、王充研究について『王充新八論』（中国社会科学出版社2003年版）、『日本の王充・《論衡》研究論著目録編年提要』（台湾知書房2005年版）、『王充新八論続編』（中国社会科学出版社2007年版）がある。小論の董仲舒観と王充観はおおよそ上記の拙著による。

純有駁。性情〔生〕於陰陽、安能純善？仲舒之言、未能得實。⁷

この一節では、王充は董仲舒の人性論を「未だその真実を得られなかった」と批判した。董仲舒の説の原文は、『春秋繁露』と「対策」にはなかったものの、それに類似する言葉があった。

『漢書・董仲舒伝』の「賢良対策」（以下「対策」と略す）の「中」には、「性者、生之質也。情者、人之欲也」とある。『春秋繁露・深察名号第三十五』（以下『春秋繁露』を引用する際、篇名と順序のみ示す）には、「天地之所生、謂之性情、性情相与為一瞑、情亦性也、謂性已善、奈其情何？故聖人莫謂性善、累其名也。」とある。

要するに、人性に「性」と「情」があり、「性」の性質は「仁」であり、「情」の性質は「貪」であるがゆえに、人性は「善」でもなければ、「悪」でもない。ただ、中人の「善」の質があり、「王」という聖人が教化すれば、「善」になれる、それを「民受未能善之性于天、而退受成性之教于王、王承天意以成民之性为任者也」（「深察名号第三十五」）という。

王充の批判は「不處人情性、情性有善有悪」と集中する。要するに、董仲舒の人性の中に善悪を兼有するという説を批判したのではなく、董仲舒の人を「善人」と「悪人」と分けられない説を批判した。王充の人性論によれば、人が生まれたときに、「天」から厚い「気」を受ければ善人になり、薄い気を受ければ悪人になる。いったん善悪になったらもう変更ができない、それは「命」という。ただ、中人は変更ができる。これについて、王充は次のようにいう。

人善因善、悪亦因悪。初稟天然之姿、受純壹之質、故生而兆見、善悪可察。無分於善悪、可推移者、謂中人也、不善不悪、須教成者也。（本性篇）

明らかに、王充の中人を教育すれば「善」になれる説は、孔子の「上智下愚」説から董仲舒の「民受未能善之性于天、而退受成性之教于王」までの説と合致しているというのが事実のようである。

第22「龍虚篇」に1箇所がある。

彼短書之家、世俗之人也。見雷電發時、龍隨而起、當雷電〔擊〕樹木（擊）之時、龍適與雷電俱在樹木之側、雷電去、龍隨而上、故謂從樹木之中升天也。實者雷龍同類、感氣相致。故《易》曰：「云從龍、風從虎。」又言：「虎嘯谷風至、龍興景云起。」龍與云相招、虎與風相致、故董仲舒雩祭之法、設土龍以為感也。夫盛夏太陽用事、雲雨干之。太陽火也、雲雨水也、〔水〕火激薄則鳴而為雷。龍聞雷聲則起、起而雲至、雲至而龍乘

⁷ 筆者は、日本式の「書き下し文」に不得意なので、小論の引用文は「書き下し文」を付け加えないこととする。

之。雲雨感龍、龍亦起雲而升天。天極（雷）〔雲〕高、雲消復降。人見其乘雲則謂「升天」、見天為雷電則為「天取龍」。

「龍虛篇」の着眼点は、龍の存在を「虚妄」として批判したと一般的に捉えやすいが、事実ではない。「短書の家、世俗の人」が主張する龍は雷と一緒に天に昇る「天取龍」という説を非とした上で、自前の龍説を展開するのが主題である。⁸ 上記の一節はその主な内容である。要するに、龍は雷と同じ種類のもので雲とともに行動するので、董仲舒の雨を乞う儀式「雩祭」はその原理を利用し、土で龍の形を作り、それで雲を来たし、雨を招来することができた、というものである。

このような董仲舒の土龍で雨乞い方法「雩祭」についての王充の肯定的解釈と弁護は、以後の『論衡』の文章に頻繁に出てくる。「雩祭」に関しては、小論の第三節において詳しく論ずることとする。

第26「儒増篇」に3箇所がある。

儒書言：董仲舒讀《春秋》、專精一思、志不在他、三年不窺園菜。夫言不窺園菜、實也。言三年、増之也。

仲舒雖精、亦時解休。解休之間、猶宜游於門庭之側。則能至門庭、何嫌不窺園菜？聞用精者、察物不見、存道以亡身。不聞不至門庭、坐思三年、不及窺園也。《尚書毋佚》曰「君子所其毋逸、先知稼穡之艱難、乃佚」者也。人之筋骨非木非石、不能不解。故張而不弛、文王不為。弛而不張、文王不行。一弛一張、文王以為常。聖人材優、尚有弛張之時。仲舒材力劣於聖、安能用精三年不休？

「儒増篇」は「儒書」の中の幾つかの「増」、つまり、事実を過大表現するところを批判する文章である。この董仲舒「三年不窺園菜」の話は、『史記・儒林列伝』にみる。董仲舒が勉強に専念してなんと三年間も自分の庭の野菜を一顧しないといわれている。この話についての王充の批判は、董仲舒が庭に野菜を見ないのは事実であったかもしれないが、三年間も「休まない」はずがないだろ、という展開である。『史記』の話は多少過張するところがあるかもしれないが、文学的な描写にすぎなかった。王充の批判鋒先は董仲舒本人にというよりも、この「文学描写」に対して発したものといえる。それに比べて、王充の批判自身は「くだらない」としか言いようがなからう。⁹

⁸ 王充の龍に関する説は、拙論「王充論龍」（『王充新八論続編』所収、中国社会科学出版社、2007年版）をご参照されたい。

⁹ 王充のこのような「くだらない批判」は、『論衡』に随所見られる。王充の批判論について、拙著「『王充新八論』（中国社会科学出版社2003年版）の関連文章を参照されたい。

第34篇「程材篇」に1箇所がある。

夫《五經》亦漢家之所立、儒生善政、大義皆出其中。董仲舒表《春秋》之義、稽合於律、無乖異者。然則《春秋》、漢之經、孔子制作、垂遺於漢。論者徒尊法家、不高《春秋》、是暗蔽也。《春秋》、《五經》義相關穿、既是《春秋》、不大《五經》、是不通也。《五經》以道為務、事不如道、道行事立、無道不成。然則儒生所學者、道也。文吏所學者、事也。假使材同、當以道學。如比於文吏、洗滌泥者以水、燔腥生者用火。水火、道也、用之者事也、事末於道。儒生治本、文吏理末、道本與事末比、定尊卑之高下、可得程矣。

ここでの「董仲舒、《春秋》の義を表し、律に稽合し、乖異無し」とは、董仲舒の春秋学を絶賛することばである。

第37「効力篇」に2箇所がある。

世稱力者、常褒烏獲。然則董仲舒、揚子云、文之烏獲也。秦武王與孟說、舉鼎不任、絶脈而死。少文之人、與董仲舒等涌胸中之思、必將不任、有絶脈之變。

「烏獲」とは、戦国時代の力もちであった。「秦武王と孟說、鼎を挙げるに任せず、絶脈して死す」とは、秦武王が孟說と鼎を上げる試合に負けて、自分で脈を絶ち死んだ話である。

上記の文章において、王充は董仲舒と揚雄を「文章を書ける烏獲」として高く褒めた。また、文章をあまり書けない人は董仲舒と文章を競争したら同じく脈を絶ち死んでしまうのではないかとしたのである。

第38「別通篇」に5箇所がある。

1、2)

禹、益并治洪水、禹主治水、益主記異物、海外山表、無遠不至、以所聞見作《山海經》。非禹、益不能行遠、《山海》不造。然則《山海》之造、見物博也。董仲舒睹重常之鳥、劉子政曉貳負之尸、皆見《山海經》、故能立二事之說。使禹、益行地不遠、不能作《山海經》、董、劉不讀《山海經》、不能定二疑。

「董仲舒睹重常之鳥」の一句は、『山海經』の序文よれば、東方朔の誤りではないかと思われる。『山海經』冒頭の劉昕の「奏文」によると、漢武帝のとき、ある人が奇怪な鳥を取ったが、皆その鳥の名前を知らなかった、ただ東方朔は「山海經」に基づき、それを「重常の鳥」だと識別できたと言う。

3、4、5)

自武帝以至今朝、數舉賢良、令人射策甲乙之科、若董仲舒、唐子高、谷子云、丁伯玉、策既中實、文說美善、博覽膏腴之所生也。使四者經徒能摘、筆徒能記（疏）、不見古今之書、安能建美善於聖王之庭乎？夫倉頡之章、小學之書、文字備具。至於無能對聖國之間者、是皆美命隨牒之人、多在官也。「木」旁「多」文字、且不能知、其欲及若董仲舒之知重常、劉子政之知貳負、難哉！

或曰：「通人之官、蘭台令史、職校書定字、比夫太史太祝、職在文書、無典民之用、不可施設。是以蘭台之史、班固、賈逵、楊終、傅毅之徒、名香文美、委積不（繼）〔泄〕、（大）〔失〕用於世。」曰、此不繼。周世通覽之人、鄒衍之徒、孫卿之輩、受時王之寵、尊顯於世。董仲舒雖無鼎足之位、知在公卿之上。周監二代、漢監周、秦、然則蘭台之官、國所監得失也。

この一節は、まず董仲舒たちの対策を「實に中り、文說美善なり」と賛美し、その理由は、読んだ書物が多いからだとした。次の「董仲舒之知重常、劉子政之知貳負」とは、前節にも取り上げた。三番目の「董仲舒雖無鼎足之位、知在公卿之上」とは、「董仲舒が高い地位にいないものの、その対策が『公卿』のような高級官僚たちよりずっと上手だと、やはり董仲舒の対策に内容がよかった」と賛美した言葉である。

第39「超奇篇」に3箇所がある。

1)

若夫陸賈、董仲舒論說世事、由意而出、不假取於外、然而淺露易見、觀讀之者、猶曰傳記。

ここでは、陸賈と董仲舒の世事を論説する対策は、本心の「意より出て、外を假取せず」と真実性があるが、「淺露易見」つまりあまり修飾されていないので、深みがないのと評論した。

2、3)

孔子曰：「文王既沒、文不在茲乎！」文王之文在孔子、孔子之文在仲舒。仲舒既死、豈在長生之徒與？何言之卓殊、文之美麗也！

ここでは周の文王の文章の風格は孔子に継承され、孔子の文風は董仲舒に継承され、董仲舒の文風は「周長生」みたいな人に継承され、なんと卓殊で、美しいだろうと嘆いたのである。周長生について、『論衡』「超奇篇」に、「且近自以會稽言之、周長生者、文士之雄也、在州為刺史任安舉奏、在郡為太守孟觀上書、事解憂除、州郡無事、二將以全。」とある。また、「孔子の文、仲舒に在り」とは、第83「案書篇」にも詳しく論じている。

第45「明雩篇」に5箇所がある。

1)

董仲舒求雨、申《春秋》之義、設虛立祀、父不食於枝庶、天不食於下地。

2)

夫雩、古而有之。故《禮》曰：「雩祭、祭水旱也。」故有雩禮、故孔子不譏、而仲舒申之。

3、4、5)

推《春秋》之義、求雩祭之說、實孔子之心、考仲舒之意。孔子既歿、仲舒已死、世之論者、孰當復問？唯若孔子之徒、仲舒之党、為能說之。

以上の五箇所は全部董仲舒の雩祭の意義について議論し、積極的に肯定したものである。「《春秋》の義を推し、雩祭の説を求め、孔子の心を実し、仲舒の意を考える」とは、董仲舒の雩祭は実に春秋の原理にのっとり、孔子の精神を継承的に実践したものだとした。この問題について、第三節において詳しく論じることとする。

第46「順鼓篇」に5箇所がある。

1、2)

王者三公、各有所主。諸侯卿大夫、各有分職。大水不責卿大夫而擊鼓攻社、何（知）〔如〕？不然、魯國失禮、孔子作經、表以為戒也。公羊高不能實、董仲舒不能定、故攻社之義、至今復行之。使高尚生、仲舒未死、將難之曰：久雨湛水溢、誰致之者？使人君也、宜改政易行以復塞之。如人臣也、宜罪其人以過解天。如非君臣、陰陽之氣偶時運也、擊鼓攻社、而何救止？

3)

攻社之義、於事不得。雨不霽、祭女媧、於禮何見？伏羲、女媧、俱聖者也。舍伏羲而祭女媧、《春秋》不言。董仲舒之議、其故何哉？

4、5)

仲舒之意、殆謂女媧古婦人帝王者也。男陽而女陰、陰氣為害、故祭女媧求福佑也。傳又言：共工與顓頊爭為天子、不勝、怒而觸不周之山、使天柱折、地維絕。女媧消煉五色石以補蒼天、斷鯀之足以立四極。仲舒之祭女媧、殆見此傳也。本有補蒼天、立四極之神、天氣不和、陽道不勝、儻女媧以精神助聖王止雨湛乎！

この五箇所も董仲舒の雩祭についての議論で、次の節で詳しく論じることとする。

第47「乱龍篇」に3箇所がある。

1)

董仲舒申《春秋》之雩、設土龍以招雨、其意以云龍相致。《易》曰：「云從龍、風從虎。」以類求之、故設土龍。陰陽從類、云雨自至。

2、3)

仲舒覽見深鴻、立事不妄、設土龍之象、果有狀也。龍暫出水、云雨乃至。古者畜龍御龍常存無云雨、猶舊交相關遠、卒然相見、歡欣歌笑、或至悲泣涕、偃伏少久、則示行各恍忽矣。《易》曰：「云從龍。」非言龍從云也。云樽刻雷云之象、龍安肯來？夫如是傳之者何可解、則桓君山之難可說也、則劉子駿不能對、劣也。劣則董仲舒之龍說不終也。《論衡》終之。故曰「乱龍」。〔乱〕者、終也。

三箇所のみだが、董仲舒の雩祭を全面的に肯定したものである。「乱龍篇」の内容は全体的にその肯定論を展開するものである。これについて、「乱龍篇」はあまりにも王充の「虚妄疾」精神に反しているの、「にせもの」のではないか、という説が出ている。しかし、小論にここまで取り上げてきた王充の「雩祭」に関する語録からみれば、そんなに懸け離れていないことが明らかである。「乱龍篇」の内容と「乱龍篇」の偽篇説について、別の拙論で詳しく論じたことがあるので、参考されたい。¹⁰

第55「感類篇」に3箇所がある。

1)

難之曰：「《春秋》大雩、董仲舒設土龍、皆為一時間也。一時不雨、恐懼雩祭、求有請福、憂念百姓也。」

2、3)

大旱、《春秋》雩祭、又董仲舒設土龍、以類招氣。如天應雩龍、必為雷雨。何則？秋夏之雨、與雷俱也。必從《春秋》、仲舒之術則大雩龍、求怒天乎！

この3箇所も董仲舒の雩祭についての議論で、次の節で詳しく論じることとする。

第61「佚文篇」に1箇所がある。

孝武之時、詔百官對策、董仲舒策文最善。王莽時、使郎吏上奏、劉子駿章尤美。美善不空、才高知深之驗也。

¹⁰ 「『乱龍篇』は偽篇なのか」、『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』第45号、2007年度。

この一箇所は、前掲の「別通篇」と「超奇篇」の文章と同じ、董仲舒の対策を「才高く、知深し」と賛美するものである。

第63「死偽篇」に3箇所がある。

董仲舒請雨之法、設土龍以感氣。夫土龍非實、不能致雨、仲舒用之致精誠、不顧物之偽真也。然則周公之請命、猶仲舒之請雨也。三王之非鬼、猶聚土之非龍也。

ここ所も董仲舒の雩祭についての議論であるが、前の説のやや違う。これについて、次節で詳しく論じることとする。

第78「実知篇」に7箇所がある。

孔子將死、遺讖書曰：「不知何一男子、自謂秦始皇、上我之堂、踞我之床、顛倒我衣裳、至沙丘而亡。」其後秦王兼吞天下、號始皇、巡狩至魯、觀孔子宅、乃至沙丘、道病而崩。又曰：「董仲舒乱我書。」其後江都相董仲舒、論思《春秋》、造著傳記。又書曰：「亡秦者胡也。」其後二世胡亥竟亡天下。用三者論之、聖人後知萬世之效也。孔子生不知其父、若母匿之、吹律自知殷宋大夫子氏之世也。不案圖書、不聞人言、吹律精思、自知其世、聖人前知千歲之驗也。

曰：此皆虛也。案神怪之言、皆在讖記、所表皆效圖書。「亡秦者胡」、《河圖》之文也。孔子條暢增益以表神怪、或後人詐記以明效驗。高皇帝封吳王、送之、拊其背曰：「漢後五十年、東南有反者、豈汝邪？」到景帝時、濞與七國通謀反漢。建此言者、或時觀氣見象、處其有反、不知主名。高祖見濞之勇、則謂之是。原此以論、孔子見始皇、仲舒、或時但言「將有觀我之宅」、「乱我之書」者、後人見始皇入其宅、仲舒讀其書、則增益其辭、著其主名。如孔子神而空見始皇、仲舒、則其自為殷後子氏之世、亦當默而知之、無為吹律以自定也。孔子不吹律、不能立其姓、及其見始皇、睹仲舒、亦復以吹律之類矣。案始皇本事、始皇不至魯、安得上孔子之堂、踞孔子之床、顛倒孔子之衣裳乎？始皇三十七年十月癸丑出游、至云夢、望祀虞舜於九嶷。浮江下、觀藉柯、度梅渚、過丹陽。至錢唐、臨浙江、濤惡、乃西百二十里、從陝中度、上會稽、祭大禹、立石刊頌、望於南海。還過、從江乘、旁海上、北至琅邪。自琅邪北至旁、成山、因至之罘、遂并海西、至平原津而病、崩於沙丘平台。既不至魯、讖記何見而云始皇至魯？至魯未可知、其言孔子曰「不知何一男子」之言、亦未可用。「不知何一男子」之言不可用、則言「董仲舒乱我書」亦復不可信也。行事、文記譎常人言耳、非天地之書、則皆緣前因古、有所據狀。如無聞見、則無所狀。凡聖人見禍福也、亦揆端推類、原始見終、從閭巷論朝堂、由昭昭察冥冥。讖書秘文、遠見未然、空虛暗昧、豫睹未有、達聞暫見、卓譎怪神、若非庸口所能言。

この篇では、「董仲舒、我書を乱す」を虚言とし、「其の後、江都相董仲舒、《春秋》を論思し、傳記を造著」したとした、

第80「定賢篇」に2箇所がある。

1)

若董仲舒信土龍之能致雲雨、蓋亦有以也。夫如是、應天之治、尚未可謂賢、況徒得人心、即謂之賢、如何？

2)

趙人吾丘壽王、武帝時待詔、上使從董仲舒受《春秋》、高才、通明於事後為東郡都尉。

「若董仲舒信土龍之能致雲雨、蓋亦有以也」とは、董仲舒の雩祭に一理があるという。これについての議論で、次の節で詳しく論じることとする。第二箇所は、趙人吾丘壽王が董仲舒について「春秋学」を勉強したという。

第83「案書篇」に10箇所がある。

1、2)

《新語》、陸賈所造、蓋董仲舒相被服焉、皆言君臣政治得失、言可采行、事美足觀。鴻知所言、參貳經傳、雖古聖之言、不能過增。陸賈之言、未見遺闕、而仲舒之言雩祭可以應天、土龍可以致雨、頗難曉也。

「《新語》、陸賈所造、蓋董仲舒相被服焉、皆言君臣政治得失、言可采行、事美足觀」とは、董仲舒の学問は陸賈に近い、当時の政治得失を議論するもので、内容があつて文章も綺麗だと賛美するものである。前掲の「佚文篇」、「別通篇」および「超奇篇」の内容と一致している。

「仲舒之言雩祭可以應天、土龍可以致雨、頗難曉也。」とは「雩祭」のことで、次の節で論じることとする。

3、4、5、6、7、8、9、10)

董仲舒著書不稱子者、意殆自謂過諸子也。漢作書者多、司馬子長、揚子云、河漢也、其余涇渭也。然而子長少臆中之說、子云無世俗之論。仲舒說道術奇矣、北方三家尚矣。讖書云「董仲舒乱我書」、蓋孔子言也。讀之者或為「乱我書者、煩乱孔子之書也」、或以為「乱者理也、理孔子之書也」。共一「乱」字、理之與乱、相去甚遠。然而讀者用心不同、不省本實、故說誤也。夫言「煩乱孔子之書」、才高之語也。其言「理孔子之書」、亦知奇之言也。出入聖人之門、乱理孔子之書、子長、子云無此言焉。世俗用心不實、省事失情、二語不定、轉側不安。案仲舒之書不違儒家、不(及)[反]孔子、其言「煩乱孔子之書者」、非也。孔子之書不乱、其言「理孔子之書」者、亦非也。孔子曰「師摯之始、《關雎》之乱、洋洋乎盈耳哉！」乱者(於)[終]孔子言也。孔子生周始其本、仲舒在漢終其末盡也。皮續太史公書、蓋其義也。賦頌篇下其有「乱曰」章、蓋其類也。孔子終

論、定於仲舒之言、其修雩始龍、必將有義、未可怪也。

顏淵曰：「舜何人也？予何人也？」五帝、三王、顏淵獨慕舜者、知己步騶有同也。知德所慕、默識所追、同一實也。仲舒之言道德政治、可嘉美也。質定世事、論說世疑、桓君山莫上也。故仲舒之文可及、而君山之論難追也。驥與眾馬絕跡、或蹈驥哉？有馬於此、足行千里、終不名驥者、與驥毛色異也。有人於此、文偶仲舒、論次君山、終不同於二子者、姓名殊也。

漢の時代の緯書に「董仲舒、我書を乱す」という言葉があつて、これは孔子の予言といわれた。「乱」の意味について、王充はまず第47「乱龍篇」において、「乱とは、終なり」といい、「乱」とは「終」、つまり「完結」の意味だ、と述べた。第78「実知篇」において、「其の後、江都相董仲舒、《春秋》を論思し、傳記を造著す」といい、ほんとは董仲舒が孔子の經典を研究し、伝記まで作ったとした。「案書篇」において、さらに「乱とは孔子の言を終える」と断言し、董仲舒の説は、孔子に反するところなく、孔子の言葉と理論を見事に集大成した、としたのである。

第84「対作篇」に4箇所がある。

董仲舒作道術之書、頗言災異政治所失、書成文具、表在漢室。主父偃嫉之、誣奏其書。天子下仲舒於吏、當謂之下愚、仲舒當死、天子赦之。夫仲舒言災異之事、孝武猶不罪而尊其身、況所論無觸忌之言、核道實之事、收故實之語乎！故夫賢人之在世也、進則盡忠宣化、以明朝廷。退則稱論貶說、以覺失俗。俗也不知還、則立道輕為非。論者不追救、則迷乱不覺悟。

ここでの「董仲舒作道術之書、頗言災異政治所失、書成文具、表在漢室。主父偃嫉之、誣奏其書。天子下仲舒於吏、當謂之下愚、仲舒當死、天子赦之。」とは、『漢書・董仲舒』に見る。これについて、王充は、「仲舒は災異の事をいったのに、武帝はそれでも処罰せずに、その身を尊重した。まして議論は忌諱に触れる言葉とて無く、実際の道理に合う事を正し、史実の語を入れているからにはなおさらだ。」といい、董仲舒の例を持って自己弁解した。

第85「自紀篇」に1箇所がある。

按古太公望、近董仲舒、傳作書篇百有余、吾書亦才出百、而云泰多、蓋謂所以出者微、觀讀之者不能不譴呵也。河水沛沛、比夫眾川、孰者為大？虫繭重厚、稱其出絲、孰為多者？

「自紀篇」のこの部分では、王充は他人の『論衡』に対する幾つかの可能な攻撃を予想して予め反撃を用意したものである。ここでは、ある人が『論衡』の文章は多すぎと攻撃して来るのを予想して、「多くはないよ、だって、古代の太公望、近くの董仲舒はみな百

篇以上の文章を書いたよ」というような口調で反発した。

上記の如く、本節は『論衡』に見られる董仲舒論を精密に統計した。その統計の結果が以下の一覧にまとめることができた。

- 第13「本性篇」 3箇所。董仲舒人性論を論議し、一部批判した。
- 第22「龍虚篇」 1箇所。「雩祭」を議論。
- 第26「儒増篇」 3箇所。「三年不窺園菜」を議論したが、董仲舒本人批判ではなかった。
- 第34「程材篇」 1箇所。董仲舒の春秋学を褒めた。
- 第37「効力篇」 2箇所。董仲舒の文章褒める。
- 第38「別通篇」 5箇所。前の2箇所が間違い。後の3箇所は董仲舒の対策を褒める。
- 第39「超奇篇」 3箇所。前の1箇所は対策を議論。後の2箇所は董仲舒の文風は褒めた。
- 初めて「孔子之文在仲舒」が出てきて、後の「案書篇」につながる。
- 第45「明雩篇」 5箇所。雩祭を議論。
- 第46「順鼓篇」 5箇所。雩祭を議論。
- 第47「乱龍篇」 3箇所。雩祭を議論。
- 第55「感類篇」 3箇所。雩祭を議論。
- 第61「佚文篇」 1箇所。対策を賛美。
- 第63「死偽篇」 3箇所。雩祭を議論。
- 第78「実知篇」 7箇所。「孔子之文在仲舒」と「董仲舒乱我書」を論議。
- 第80「定賢篇」 2箇所。まず雩祭を議論。次は春秋学を賛美。
- 第83「案書篇」 10箇所。まず文章を賛美。次は「董仲舒乱我書」を論議。
- 第84「対作篇」 4箇所。董仲舒の上書を議論。
- 第85「自紀篇」 1箇所。董仲舒などが百篇以上の文章を書いたことをもって『論衡』に対する批判を弁解する。

三、董仲舒の「土龍致雨」の「雩祭」について

第二節の統計を見てみると、もっとも目立ったのは、『論衡』の第22「龍虚篇」、第45「明雩篇」、第46「順鼓篇」、第47「乱龍篇」、第55「感類篇」、第61「佚文篇」、第63「死偽篇」、第80「定賢篇」など、八篇の文章の数十箇所で開催した董仲舒の雨乞い儀式「雩祭」についての議論であった。しかも、その中で「乱龍篇」は「雩祭」を議論する専門論文であり、「明雩篇」と「順鼓篇」の主な内容でもある。

いままでの先行研究に、「雩祭」議論について二つの見方がある。

一つは、胡適が提起し、任繼愈の《中國哲學發展史・秦漢》の「王充的批判哲學」という文章で詳しく論じた「乱龍篇」の偽篇説である。¹¹それについて、筆者は別の文章で検

¹¹ 胡適の観点は《中國哲學史大綱》(上)の「第一篇、導言」にみる。台湾遠流出版公司『胡適作品集』31『中国古代哲学史』第11ページ。任繼愈主編的《中國哲學發展史・秦漢》の「王充的批判哲學」は人民出版社1985年版、第508ページ。

証したので、参照されたい。¹²

二つ目は、王充は董仲舒の「雩祭」の真实性を否定したが、「雩祭」の政治的社会的意義を肯定する二分論である。たとえば、前掲の周桂鈿氏著『虚実之弁』、「第十章、広評諸子」「一、董仲舒」では、「真実を求める方面、王充は『雩祭』を否定したが、善を求める方面では、逆に『雩祭』を肯定した」（「在求真方面、王充否定了『雩祭』、又在求善上、肯定『雩祭』」）と述べていた。¹³しかし、王充は本当に「雩祭」に反対したのか？

一方、日本では大久保隆郎氏の「桓譚と王充Ⅲ～祭祀観の継承とその展開～」¹⁴という論文では、王充は道徳的当為として祭祀の意義を認めた。このことは、雨乞いの祭である雩祭を肯定し、積極的にその意義を論ずることにまで展開する。「王充がなぜ雩祭を肯定したのか。天人感応原理を批判した王充の合理的思惟は突如として変化したかに見える。」大久保氏の解釈はこうなる、「単純に言えば、時代の相違、両者の立場の相違であると考えられる」。王充の時代はすでに儒教礼教主義が確立し、王充の思想はその影響を受けて形成されたものなので、「礼教主義の儒教経典を否定できなかった王充の歴史的現実を窺える」、という。要するに、王充の思想はもともと「天人感応原理を批判した合理的思惟」であったが、「雩祭」については、なんと反対方向に「突如変化」したという。

ここでは、一体王充が董仲舒の雨乞い儀式「雩祭」について、どんな態度を取っており、どんな持論を展開して行ったのか、ということを究明したい。

I、龍の真偽について

世の中に龍は存在しているのか？どんな象徴意義を持つか？

董仲舒の雨乞い儀式「雩祭」は、土で龍の形にして、龍と雲雨の関係を『易』の「雲從龍、風從虎」の感応原理に従うと、土龍がいれば雲が来て雨が降ることになる。言うまでもなく、このような雨乞いの方法と儀式「雩祭」は「龍」の存在を前提としている。

では、まず王充は「龍」の存在についてどんな立場を取っているかを見てみよう。

周知のように、「龍」とは中国神話あるいは伝説の中に出て来る仮想の神話動物で、神靈性、天人感応性、君主神聖性を持つ。¹⁵

龍の神靈性、天人感応性と君主神聖性は龍の基本的な性質であり、龍の存在を認めれば、この三性を認めることになる。私の研究によれば、王充の「龍」論は、龍の存在を前提としており、また龍の三性についても認めているだけではなく、理論の加担までした、彼の「黄龍が漢の土色に應ずる」理論、あるいは龍を中心とする符瑞をもって漢王朝を賛美する頌漢論（大漢論）などがそれである。

¹² 拙論「王充『論衡』の『乱龍篇』は偽篇なのか」を参照されたい。『大分県立芸術文化短期大学研究紀要』45巻、2007年。

¹³ 周桂鈿氏著『虚実之弁』、人民出版社1994年版。第282ページ。

¹⁴ 《福島大学教育学部論集》人文科学部門32～2、1980年12月に掲載。

¹⁵ 龍の性質および王充の龍論について、拙論「王充論『龍』」を参照されたい。『王充新八論続編』、中国社会科学出版社2007年版。

Ⅱ、龍の動き方について

では、龍が存在していれば、どんな形をしてどんな動きをみせるか？

これについて、王充は独自の説を持っている。前掲の「龍虚篇」では、王充の言うには、

實者雷龍同類、感氣相致、故《易》曰：「云從龍、風從虎。」又言：「虎嘯谷風至、龍興景云起。」龍與雲相招、虎與風相致、故董仲舒雩祭之法、設土龍以為感也。

「龍虚篇」の主題は「龍」の存在を「虚妄」として批判するのではなく、「短書の家、世俗の人」が主張する龍が雷と一緒に天に昇る「天取龍」という説を非とし、自前の龍説を展開した。要するに、龍は『易』の言った「云從龍、風從虎」の原理に従い、雲と共に行動し、雲が出現すれば龍が動くので、「天取龍」の説は信じられない「虚妄」になる。同じ言い方は、第一節に取り上げた董仲舒と関わる「乱龍篇」、「感類篇」と「死偽篇」にも見られ、またほかの龍に関する文章にも頻繁に出てくる。

また、「道虚篇」において、王充は次のように言う、

唯龍無翼者升則乘雲。虚敖言若士者有翼、言乃可信。今不言有翼、何以升雲？且凡能輕舉入雲中者、飲食與人殊之故也。龍食與蛇異、故其舉措與蛇不同。聞為道者服金玉之精、食紫芝之英、食精身輕、故能神仙。若士者食合蚘之肉、與庸民同食、無精輕之驗、安能縱體而昇天？聞食氣者不食物、食物者不食氣。若士者食物如不食氣、則不能輕舉矣。

人間あるいは蛇と比べて食べ物が違うので、「龍」は翼がなくても飛行できる、という。

要するに、王充は自前の龍説をもって「龍不能神、不能昇天」（龍虚篇）を「虚妄」として批判し、その上で自分の独自の龍説を述べた。これこそ「龍」に関する王充の「虚妄を疾む」理論の真相である。

Ⅲ、龍と雲雨の関係と董仲舒の土龍についての認識

「Ⅱ」に述べたように、龍は『易』の言った「云從龍、風從虎」の原理に従い、雲と共に行動するので、逆に「龍」のようなものがあれば、雲も出現するということになる。「龍虚篇」は「龍與雲相招、虎與風相致、故董仲舒雩祭之法、設土龍以為感也」といい、つまり、董仲舒の雨を乞う方法「土龍致雨」はその原理を利用し、土で龍の形を作り、それで雲を招いて、雲が着たら雨が降る、と解釈したのである。また、「乱龍篇」、「感類篇」、「死偽篇」などはこのような説に対して、賛成の意を表し、理論加担した。また、「定賢篇」では、「若し董仲舒土龍の能く雲雨を致すことを信ずれば、蓋し亦た以（ゆえ）有り」と言い、董仲舒のやり方に一理あるとしたのである。

Ⅳ、土龍雨乞いの可能性および董仲舒「土龍致雨」の動機の解釈

『易』の言った「云從龍、風從虎」の原理に逆に推理すれば、龍の形をしているものがあれば、雲が出て、雨が降る。この逆推理こそ、王充の董仲舒龍論解説のキーポイントである。「乱龍篇」では、これを中心にして董仲舒のために「土龍致雨」の理論を展開していく。

しかし、これについて、実は王充も時々自信喪失なので、別の文章では、「若し董仲舒、土龍の能く雲雨を致すことを信ずれば、蓋しまた以（ゆえ）有り」（実知篇）といいながら、「而し仲舒の言う零祭天に応ずるべき、土龍雨を致すべきとは、頗た曉り難し」（案書篇）といい、董仲舒の「土龍致雨論」に一理があるかもしれないが、やはりわかり難い、という半信半疑の言い方もする。

最後に「土龍致雨」は雨を致さなくても、「一時不雨すれば、恐懼のため零祭し、求めて福請いありて、百姓を憂念す」（感類篇）といい、董仲舒の「恐懼のため零祭し」、「百姓を憂念す」社会的意義を主張した。

以上の四説をまとめると、次の如きである。

王充は龍の存在と龍の神靈性、天人感應性および君主神聖性を認めて、龍の動きは『易』の言った「云從龍、風從虎」の原理に従って行動するとしている。このような「龍」理論に基づいて、王充は董仲舒の「土龍致雨法」と「零祭」を検証した結果、「龍と雲と相招し、虎と風相致す。故に董仲舒の零祭の法、土龍を設けて以て感となす」という肯定の結論を下した。この結論について、王充も時々自信がないので、董仲舒の理論と方法に、一理があるかもしれないがわかり難い、とも言った。そして最後の逃げ道として、「土龍致雨」は雨を致さなくても、「恐懼のため零祭し」「百姓を憂念する」社会的意義を主張した。

そうすれば、前掲した周氏の「真実を求める方面、王充は『零祭』を否定したが、善を求める方面では、逆に『零祭』を肯定した」という観点は、真実を認めない二元論にすぎないことが明らかになった。その二元論は、王充が董仲舒の「零祭」の「土龍致雨」の方法を否定するが、「零祭」の社会的意義を肯定する、という論法であるが、真実は、王充が董仲舒の「零祭」の「土龍致雨」の方法を否定していなかった。そのどころか、理論加担までしたのである。

一方、大久保氏の観点は、王充の理論に対する苦渋の弁護論に過ぎなかった。要するに、王充の基本観点は一応「合理主義」、「無鬼神論」および「虚妄を疾む（にくむ）」であるとするが、時々それらから逸脱する、王充の零祭肯定は、まさにその逸脱、あるいは「突如の変化」の再現だ、ということである。このような見方は、王充の思想は「合理主義」、「無鬼神論」および「疾虚妄」だという先入観的な大前提に基づいたものだとわざるを得ない。

小論の観点から見れば、上記の二つの観点も、王充の零祭肯定と弁解は、明らかに非合理主義あるいは反合理主義のものであり、龍の存在の承認および龍と雲雨の関係を『易』の「雲從龍、風從虎」の感應原理とするのも、典型的な天人感應論に他ならなかったことにも関わらず、無理やりに認めない、あるいは苦渋な弁解の上で成り立ったものだと考える。

逆に言えば、王充の「龍」論と王充の雩祭肯定と弁解を事実として認めれば、最初から王充の思想は「合理主義」「無鬼神論」だと言っておいて、その後、「龍」論や「土龍致雨」の天人感応論、有神論性質について、無理に認めない、あるいは苦渋な弁解というようなことがされなくてもよいのであろう。

四、結語

小論の第二節では、『論衡』各編にある董仲舒を言及する箇所を精密に統計した。それによって、王充の「董仲舒論」は一目瞭然になった。

王充の「董仲舒論」は、下記の幾つかの点にまとめられる。

- 1) 董仲舒の人性論を論議し、部分的に批判したが、賛同部分もあった。
- 2) 「三年不窺園菜」や董仲舒が百篇以上の文章を著したことなどを歴史事実として取り上げて議論した。

上記の2点に関して、董仲舒は王充にとって、普通の歴史人物にすぎなかった。

- 3) 春秋学、対策などに現れている董仲舒の学問、文章、文風を議論し、賛美の意を表し、最大級の賛辞をおくった。
- 4) 「孔子之文在仲舒」、「董仲舒乱我書」という説について、王充は、董仲舒が反することなく孔子の經典を研究して継承し、解説書の伝記を作った、とした。また、「乱とは孔子の言を終える」と断言し、董仲舒は孔子の言葉と理論を見事に集大成した、と強調したのである。

上記の2点において、王充は董仲舒の理論に傾倒し、強い影響を受けたともいえる。

- 5) 董仲舒の「雩祭」についての議論、肯定、弁解と理論加担。

小論の第三節では、この「雩祭」論述について詳細に考察した。王充の論述は、「土龍致雨」という雨乞い方法と、「憂念百姓」という「祭」の意義にと両方面に集中した。結論として、王充は、董仲舒の「雩祭」について殆どと批判しなかった、むしろ肯定の意を示し、理論加担までしたといえる。しかも、その理論加担は、系統的に行われ、「龍虚篇」は主に「龍」理論の構築という役割を果し、「乱龍篇」は主に「土龍致雨」の理論と方法を具体的に解釈して弁護し、ほかの文章は主に「雩祭」の社会的意義を論じたものである。